幼児の発達課題と社会

津守　真

幼児が一人の人間として円満な成長発達をとげることは幼児教育の重要な課題である。一人の社会人として立つためには、情緒的にも社会的にも成熟した人格として成長することが必要である。日々新しい経験にぶつかって、情緒的に混乱することなく適切に処理し、自分にも他人にも役立つように発展させていく能力などを、どのようにして育てていくことができるのだろうか。健全な人格の成長は長い期間を通ってなされるものであるが、それは幼児期から考えていかなければならないものである。ことに幼児期は、おとなの言動に左右されやすい不安定な時期であって、人格形成の上におとなの影響が強くはたらく時期である。この発達の初期から考えられねばならない一つの課題について、今回はとくに原理的な考察をしてみたいと思う。

人が周囲の世界とぶつかる様式に次の四つが考えられる。

1　満足
2　挑戦—探索
3　脅威—不安
4　フラストレーション

以下に、幼児期の教育と関連させながら、説明を加えてみよう。

一、満足の経験

人はすべて欲求をもっている。生理的な欲求もあるし、社会的な欲求もある。それが、まわりの世界によって満された状態が満足の経験である。乳児期には、乳を吸うというような欲求が重要であるし、幼児期には、生理的な欲求の他に、集団に所属するというよう

な社会的欲求の重要性がましてくる。いずれの発達段階においても、欲求がみたされるという経験は、健全な人格の発達の上にきわめて重要であり、それは教育においても果されなければならない基本的な課題である。

欲求が満されるということは、認識能力の発達の上にもたいせつである。たとえば、乳児期に、心ゆくまで乳を吸って満ち足りた後の乳児は、目をひらいてあたりを見まわし、きこえてくる音に耳を傾け、感覚的経験をたのしむのである。欲しいが得られないという状態のときには泣き叫び、周囲の光や音に注意を向けることができない（乳児期の口唇の満足の経験が、後の認識能力の発達に大きな影響を与えることを示す研究もある）。幼児期においても同様である。仲間に入りたいのに仲間はずれにされている幼児は、他の子どもの感情や意図を正しく見てとることができない。そして、他人の感情はおかまいなしに、仲間に加わるためにいろいろの手段をとる。人間の生活には、欲求がみたされないことも多いから、それに対処するしかたを学ぶことが必要なのであるが、そのためには基本的に欲求が満足された経験をもつことが必要なのである。ことに乳幼児期には、満足の経験をすることなしに、フラストレーションに耐える力は生れてこないのである。満足の経験は、物の世界に対する自信、人の世界に対する信頼の態度をつくっていく。幼稚園期になると、生活の内容も複雑になり、欲求の具体的内容はさまざまな形をとるが、一日の生活を満された気持で終るという経験は、次の日の新しい経験を始めるのによいスタートである。

二、挑戦—探索の経験

人間は、自ら刺激に反応し、活動する力があるから発達するのである。人はこのような傾向を備えて生れてきている。生れたときから、日々新しい経験にぶつかって、それに自ら働きかけていく力をもっている。ある時期の乳児は何にでも興味をもって、つまみ、口にいれ、そしていたずらする。こうして乳児は周囲のものの世界に熟知していく。幼児は一応身のまわりの事物に習熟した段階であるが、新しく目ざめてくる知能と興味によって、周囲の世界にたえず未知のものを発見していく。環境を備え、刺激を与えれば、幼児はそれぞれの力に応じて、自ら発見し、選択し、挑んでいく。だから、子どもが何に目をつけ、何をしようとするかを見ることは、指導の上できわめて重要なのである。

新しい刺激や経験にぶつかって、挑戦し、探索するということは、それは満足の経験に導かれるだろうという期待の上に成立している。多分満足な経験となるだろうという見通しがあるので、挑戦—探索—冒険を試みる。そしてそれが満足なものとなったときには、新たな成功感を得て、その人の世界は拡大していくのである。

だから、幼児が新しい経験にぶつかったときには、幼児が自ら

それととりくむように、はげまし、自信を与えることが重要である。おとなの考えるやり方とは違ったやり方をすることに、おとなは寛容でなければならない。たとえそれで失敗しても、最初はうまくできないのが当り前であるから、十分に時間を与えることが必要である。そして子どもはそれを自分で解決できるのだということを信頼して、子どものやり方を見守ることがたいせつである。

これは幼児が物ととりくむ場合にも、人ととりくむ場合にも言いうることである。そして、いずれの場合にも、おとなが解決を与えるのではなくて、幼児自身が解決の試みをするときに、それぞれの幼児の個性に応じた新しい解決法が見出される。それは創造的な態度を養うために重要である。この場合、おとなの機能として重要なことは、幼児をはげまして、積極的に外の世界に立ち向い、自分で解決法を見出すようにしてやること、またそのような自信を与えることである。

三、脅威―不安の経験

これは、もしかするとうまくいかないかもしれないという見通しをもった経験である。新しい場面にぶつかったとき、人はそれに挑戦し探索しようという気持と、それを恐れ、避けようという気持とが同時にはたらく。全く新しい場面であるほど、それが脅威となり、不安として経験されることが多い。このような場合に幼児のとる行動はまちまちである。ある子どもは椅子に坐ったまま動こうとしない。ここにいれば安心だとわかった場所に定住するのである。ある子どもは、自分が教えられたきまりきったやり方をくりかえす。これもこうすれば安心だと分っているやり方にしがみついて、別のやり方が考えられない場合である。ある子どもは、先生が何を言っても、いやと言って反抗し、他人をうけつけない。ある子どもは、それをやらないですまそうとし、その場面から逃避する。これはいずれも自分の世界をひろげていくのには役立たないやり方である。ある子どもは、少しずつ手を出して、それがどういうものであるかたしかめながら、次第に未知の世界を知り、それによって新しい世界を自分のものとしていく。ある子どもは未知のものにでも自発的にすなおにふれていくことができる。これは自分の世界を次第にひろげていく積極的なやり方である。

同じような新しい場面にぶつかっても、子どもによってそれを脅威とうけとり、あるいは挑戦としてうけとる。新しい場面にぶつかって成功感を多く得ている子どもは、今度もきっとできるというゆとりと自信をもってそれを挑戦としてうけとっていくであろうし、失敗の経験を多くしている場合には、それを脅威としてうけとって、自分の殻の中にひきこもり、新しい発展の機会を逸してしまうであろう。

また、幼児の経験に対して、おとながどのようにそれを扱うかと

いうことも重要な関連をもつ。子どもにそれをのりこえることができるという信頼をもって扱うか、あるいは、できないかもしれないという不安な見通しをもって扱うかによって大きな相違がある。おとながそばにいて安心させるというだけで、幼児は不安なく新しい経験にぶつかることもある。

要するに満足と挑戦の経験を多くするということが、脅威—不安の経験に適切に対処するように必要であるということができる。

四、フラストレーションの経験

目標が達せられなかった場合、あるいは欲求が満されなかった場合、人はフラストレーションの状態になり、落胆する。これも子どもの生活の中でしばしばぶつかる経験である。落胆したときに、それに耐える力を養うことがたいせつであるが、それには多くの成功と満足の経験を必要とする。そして情緒的に豊かな成熟をしているときには、わずかのことで落胆せず、いろいろの角度から自分自身の経験を検討してみることができる。そして狭い目標に固執せず、目標をかえてみたり、やり方をかえてみたりして試みることができる。このような能力は、前述の一と二の経験、すなわち、満足と挑戦の経験をへてはじめてつくられるものである。その上で、フラストレーションを経験することの意味ができる。そうでなくて、フラストレーションを与えるならば、子どもは防衛的になり、発展性がなく、融通性のきかない人間になってしまうであろう。

以上に、成熟した人格として発達するのに必要な経験について述べた。これは健全な社会人として成長するのに必要な経験でもある。そして幼児期に与えられなければならないことがらである。

幼児の教育内容のことを考えるときに、多くの具体的なことが考えられるが、それがたんに個々の能力の習得にとどまらず、人格の成長に役立つように考えてゆかなければならないと思う。たとえば、何か製作のことを考えてみても、そうである材料によって何かをつくることが、材料に対する挑戦の経験としてあるいは脅威の経験として幼児の人格形成に役立っている。それを通して、幼児は世界を拡げ、あるいは、不安と脅威の中にあって、発達の機会を狭める。

教育内容が分化するほど、私どもは幼児の全体としての人格の成長ということを片すみにおしやってしまいがちである。それでは角を矯めて牛を殺すことになるので、私どもは教育内容のどこかでこの問題を本式にとり上げなければならないと思う。「社会」という領域には、教育内容として扱かわなければならないことがいろいろあるが、人格の発達のための課題をぜひ大きな問題の一つとして研究していくことが必要であると思う。全人的に豊かに成熟した人間をつくるのに、幼児教育は大きな役割を果すからである。